ジョン・スタインベックの 'Travels With Charley' について

岡　本　雅　夫

はじめに

1962年，スタインベックは，アメリカ国内旅行記を出版した．いわば彼の最新作であるが，この旅行記を通して，スタインベックの伝えるアメリカの現実，さらにスタインベックの文学的特質について考察してみたい．この小論の内容は (一)旅行の動機，目的，概要 (二)アメリカの現実 (三)スタインベックの文学的特質の三部から成つている．
(引用は，W. HEINEMANN版・TRAVELS WITH CHARLEY によつた。)

(一) 旅行の動機，目的，概要について

今度の旅行は，如何なる動機に依り又その目的は何であつたかを，スタインベックは，「"When I was very young and the urge to be some place else was on me, I was assured by mature people that maturity would cure this itch. When years described me as mature, the remedy prescribed was middle age……" (*p.* 3) ところが中年になり，更に58才の現在になつても，the urge to be some place else は依然として治らず，the virus of restlessness にとりつかれて，方向とか手順はともあれ結局は，"We find after years of struggle that we don't take a trip; a trip takes us." 一人間なら誰しもが持つ旅に出たいという衝動に駆られ，旅に連れ出された」というのである．a wayward man をもつて任じる彼の面目がうかがえる．そしてこの旅行に一つの性格を持たせるために，「パリ，ロンドンと同じくニューヨークすらも今日では個性を失つてしまつている現在，自分の住んでいるアメリカにしてもその変りようは，新聞や書物で知るのみであり，実際に自分の眼で確めた訳ではない．現在のアメリカは自分の記憶にあるものとは異つているのではないか．もしそうとすれば……"I was writing of something I did not know about and it seems to me that in a so-called writer this is criminal. So it was that I determined to look again to try to rediscover this monster land."」と述べて，'in search of America' を一応この旅行の目的にしている．しかし彼にはこの旅行に対する少くとも今一つ秘かな理由があつた．これが実は Steinbeck の人間像を最も単的に我々に伝えている部分であるが，彼は云う；"During the previous winter, I had become seriously ill with one of those carefully named difficulties which are the whispers of approaching age. When I came out of it, I received the lecture……The lecture ends, "Slow down. You are not as young as you once were." And I had seen so many begin to pack their lives in cotton and wool, smother their impulses, hood their passions, and gradually retire from their manhood into a kind of spiritual and physical semi-invalidism. In this they are encouraged by their wives and relatives and it's such a sweet trap." (*p.* 19) 寄る年波に人生への意欲を失い，精神的にも肉体的にも半病人のような状態に落ち込んで，余生を細々と暮らそうとする，いやそういう状態になるように周囲からけしかけられている男達を眺めて，自分は「人生の質と量とを交換したくない」という気持に駆られ，つまらない芝居同様，人生の舞台を去りややらず，未練がましい，芝居を演じようとは思わないと決意する．彼がこの旅に出るのは，一つには，自分の生命力が厳しい試練に堪え得るものかどうかの，死への挑戦を試みたものと云える．そして "If this projected journey should prove too much then it was time to go any way." (*p.* 20) とその決意を語つている．

斯くして彼は愈々旅行に出掛けるのであるが，全篇を通じてこの旅行記での主要な役割を演じている Charley というフランス産の老犬について触れたい．スタインベックの愛犬家としての一面はこの旅行記で十二分にうかがえるのであるが，この愛犬家としての性格は根強いものであつて1936年5月，彼か OF Mice and Men を労作中に，Toby という当時彼が飼つていた愛犬が彼の草稿を一夜台無しにして了つたことがある．この時彼は出版社宛に次のような手紙を送つた．"…Minor tragedy stalked, My setter pup (=Toby) left alone one night,

made confetti of about half of my manuscript book. Two months' work to do over again. It sets be back. There was no other draft. I was pretty mad, but the poor little fellow may have been acting critically. I did not want to ruin a good dog for a manurcript I'm not sure is good at all…"(The Viking Portable Library; Steinbeck *p.* 18) 而もこの OF Mice and Men が批評家の間に非常な反響を呼んだ時にも，出版社宛に，"I have promoted Toby-dog to be lieutenant-colonel in charge of literature. But as for the unpredictable literary enthusiasms of this country, I have little faith in them." (The V. P. L. Steinbeck *p.* 18) と書いて寄せている．Toby に比べ，先見の明を持たない文学愛好家（批評家を含めて）を痛烈に皮肉つている．批評家嫌いは作家の習いでもあろうが，スタィンベックも他聞に洩れず批評家達の独断的な評価を真向うから斥けている．この旅行記中でも，旅行記の性格について述べる際に，批評家の文芸批評に於ける態度を逆に利用して，「旅行記も旅行者の個性に従つて個性的なものにならざるを得ない」と言い，"In literary criticism the critic has no choice but to make over the victims of his attention into something the size and shape of himself." と結んでいるが，批評の対象にされる作品を 'victims' とした点に作家としての批評家に対する皮肉がこめられている．今度の旅行で彼が孤独に堪え得たのは，そして最後迄彼を慰め得たものは，Charley であることに疑いはない．この旅行記では，愛犬 Charley と作者の暖い交情が，アメリカ探訪の裏面を流れる一種の装飾的要素となつて，この旅行記に独得の風格を与えている．尤もスタィンベックの小説構成法の特徴は，一口に云つて幾つかの episodes を，巧みに構成して一篇の作品とするところにあるのだから，この点を特筆する要もない訳ではある．今度の旅行は，主としてアメリカ北西部を，それも都市は避けて，北部中西部西部の田舎を中心に踏査したものであるが，Long Island—{Maine—Middle West—Chicago}—{Minnesota—North Dakota, Montana, Idao}—{Seattle—San Francisco}—{New Mexico—Arizona, Texas, New Orleans—Alabama—Virginia}—{Pennsylvania—New Jersey—Now York} と凡そ40州にまたがつており距離にして凡そ16000 km，大体3ケ月要している．大体アメリカ合衆国の内陸を一周したことになるのだが，六十に手の届きそうな人間が，単身トラックを運転して無事こういう旅行を成し遂げたその行動力に卒直に驚かされる．そうして体験に基いて作品を書き上げるスタィンベックの本領がこの事実を通して最も強く感じられるのである．スタィンベックは，アメリカ再発見の旅で何を観察し何を感じたであろうか．以下では彼の観察した現実や事件を幾つかの点にまとめて述べることにする．

(三) スタィンベックの眼に映ずるアメリカ

(1) 産業文明の発達に起因する諸現象と彼の批判

今度の旅行で最も深い関心をスタィンベックに惹起させたものは，先づ第一にアメリカ産業文明の急速な発達と，それに伴う都市発展の様相であつた．"American cities are like badger holes, ringed with trash-all of them-surrounded by piles of wrecked and rusting automovils and almost smothered with rabbish—The mountains of things we throw away are much greater than the things we use. In this, if in no other way, we can see the wild and reckless exuberance of our production and waste seems to be the index." (*p.* 25) アメリカの都市は，その排泄物に取り囲れて窒息しそうな状態であり，錆びて捨てられた自動車を始めとする廃棄物が正にアメリカ産業の潤沢さ（exuberance）の指数(index)だと述べ更に都市が拡大する一方必然的にかつての町や村が急速に姿を消して，都市化していく状態を次のように述べている．"The big towns are getting bigger and the villages smaller. The hamlet store, whether grocery, general, hardware, clothing cannot compete with the supermarket and the chain organization. Our treasured and nostalgic picture of the village general store, the cracker-barrel store where an informed yeomanry gather to express opinions and formulate the national character, is very rapidly disappearing-people who once held family fortresses against wind and weather, against scourages of frost and drought and insect enemies, now cluster against the busy breast of the bigtown." (*p.* 65) しかしこうしてふくれ上つた都市は，「裂開性子宮(dehiscent wombs) のように裂けて，その子供を田園にかえすであろう」と表現して，果し

もなく拡大する都市，姿を消して行く村落の様相を realistic な表現で語つている．しかもこうして発展して行く現実は，破壊にも似た無残さを持つたものであり，豊かな自然を愛するスタインベックには極めて悲惨なものに思えてくるのである．大平洋岸の静かな港町であつた Seattle City の変り果てた姿に都市発展の共通した様相を見出して語る．

"The top of hills are shaved off to make leve warrens for the rabbits of the present. The high ways eight lanes wide cut like glaciers through the uneasy land. The traffic rushed with murderous intensity. This Seattle had no relation to the one I remembered …Along what had had been country lanes rich with berries, high wire fences and mile long factory stretched, and the yellow smoke of progress hung over all, fighting the sea winds' efforts to drive them off. (*p.* 162) かくの如くに一変して了つた Seattle もしかし記憶の中にあつたものが変つたというより，全く別の新しいものに成長したのであつて，決して往時を偲んで嘆いでる訳ではない，と断り乍らも，'Everywhere frantic growth, a carcinomatous growth.' どこもかしこも狂気じみた発展ぶりでまるで癌腫の拡がり方のようであるブルドーザが林をたおし，枝葉を積んで燃やしている，という風に何故成長は破壊に似ているのであろうかと嘆じざるを得ないのである．

つまり，都市の中心部は身動きもならない程混雑を極め，ついで逆にさびれ始め次第に時代遅れの様子を呈し，都市のエネルギーは，郊外に，周辺の郡部に向つて吐き出されて行くのである．

こうした現象は，緑と太陽の渓谷カリフォルニャヤの故郷でも生じていたのである．少年時代を過した，そして幾多の短編の舞台になつた故郷 Salinas もすつかり変つて了つて，スタインベックの記憶する人口四千と発表した当時の Salinas も今や人口八万を数え，もう十年も経てば二十万には達するだろうし，それから先は見当もつかない状態になつて了うだろう．"We have in the past been forced into reluctant change by weather, calamity and plague. Now the pressure comes from our biological success as a species. We have overcome all enemies but onrselves." (*p.* 175) 厳しい自然と斗つてこれを克服して来た人類も，その生物学的な成功に依つて，逆に自分自身を窮境に追い込んだ形になつている．文明の発達と相まつて繁殖を重ね乍ら生成発展を遂げる人類の未来は果してどんな状態になるのであろうかと，何か不吉な思いがするのである．この不安は，中西部の high way を走り乍ら "Evacuation Route" (an escape route) という多くの sign boards に出合い，更に深まる．つまり核爆弾が落ちた場合の「待避路」の道標と知つて慄然とするのである．これは正に a road designed by fear だと思い，多くの人間が逃げまどい道路は身動きも出来なくなり，自ら招いた破滅の淵にどつと殺倒して落ち込んで行くさまを，「幾千となく群をなして谷間を埋め食卓に上るのを待機している愚しい七面鳥に似ている」と連想するのであるが，現代の危機感がさり気なく而も強烈に滲み出ている．さて，変貌を遂げてしまつた故郷 Salinas に失望し，自分は最早故郷に対しては過去の亡霊に過ぎないと，土着の Paisano である Johnny との極めて感傷的なやりとりの後で，トーマス・ウルフの 'You Cannot Go Home Again' を口にするのであるが，全くスタインベックの心に描かれている美しきアメリカの姿は，二十世紀初頭のつまり1910～30年頃の，彼が少年時代を過したカリフォルニヤの自然であることは疑い得ない．であるからこそ近代化の波に洗われない昔ながらの自然に囲まれて，自然と渾然一体を為して natural な生活が営まれている感のある Montana 州一帯にスタインベックは手放しに惚れ込んでしまうのである．"I am in love with Montana.……the land is rich with grass and color and the mountains are the kind I would create. Here for the first time I heard a definite regional accent unaffeoted by TV-ese, a slow-paced warm speech.… the frantic bustle of America was not in Montana, the calm of the mountains and the rolling grass-lands had got into the inhabitants…." (*p.* 142) つまり Montana にはアメリカの殆どが襲われている狂的な騒しさがないから惚れ込んだと云える．この傾向はスタインベックの人生観と密接な連がりがあるのである．つまり「自然がその本来の姿を保ち，人間が生存するための知性と生存するための技術を行使する域を越えない生活を営む姿」を，自然対人間の営みの至高のものとするからである．産業文明の進歩は，田園地帯の都市化を促進させると共に，各地の地方色をも塗り潰して行き，更に radio, TV の普及に従つてアメリカの地方訛りをも無くしてし

まいつつある．スタインベックは，訛りを聞いてその出身地を云い当てることが出来た時代があつた事を想い乍ら，次のように云う．"Communications must destroy localness by a slow inevitable process.…Radio and television speech becomes standardized, perhaps better English than we have ever used. Just as our bread, mixed and baked, pachaged and sold without benefit of accident or human frailty, is uniformly good and uniformly tasteless, so will our speech become one speech."（*p.* 96）「言葉も画一化され，一様性を帯びると同時に各々が持つ特異性も味わいも失つてその持つていた詩的要素を失つてしまう．」と．high way を走り乍ら Motel や Drive Inn で，非常にしばしば目にし経験するものに 'automatic vending machine' がある．ハンカチ，クシといつた身の廻りのものから熱い各種のスープに至る迄，硬貨を入れてボタンを押せば出てくる仕組みになつている．タマゴやベーコンを頼んでも明らかに冷蔵庫に保存されていたものを取り出してフライパンで熱しただけという調子である．こういう食物までもすつかり無駄が省かれ，画一的なものになつてしまい，ボタンを押せば出てくる式になつてしまつた状態を— It is life at a peak of some kind of civilization—だと思い，食堂などでコップの一つに至るまで清潔に消毒された紙で封印してあるのには，まるで便所同然だと，tasteless を通り越して了つた味気なさを感じる．"The food is oven-fresh, spotless and tasteless; untouched by human hands……" 人の手にふれられないで出来上る料理の不味さを嘆いて，イタリヤやフランスの料理（--touched by innumerable hands）に心のうづきを感じるのである．スタインベックは，こういう状態を国民の情感と結びつけて「こういう tasteless food を平気で口にする許りか，歓迎するようになれば一体国民の情感生活はどうなるであろうか．味覚が退化してしまつて，情感に乏しくなれば安物の，セックスや嗜虐趣味を売物にした小説で，或いは又所謂ジャズで，その退化した味覚に彩りを加えて満足するようになるのであろうか．つまり…" the mental fare has bcen generalized, as pachaged and as undistinguished as the food" 精神状態も tasteless になつてしまつている．従つて政治的関心も持ち合わせていないように思われたし，強い意見も耳にしなかつた」と語つている．

一方，自動車工業の発達に伴つて high way を走るトラックの混雑振りや truck driversの生活等にも非常な興味を覚えて色々と述べているが特に，中西部，西部にかけて至る所で出会う'mobil home' は，現在の産業文明のもたらした全く新しい革命的な一つの生活方式として，詳しく述べている．これは従来の trailor house と呼ばれていた簡単な小屋のようなものを truck で引張るという安つぽい物でなくて，アルミニューム張り，二重壁になつて硬材で内張りされた全体が一個の独立した家屋と云える住宅車であり，四十フィートもの長さがあり，内部は適度に間取りされ，窓も充分に取り付けられラヂオ・テレビ等も備え付けられている．こういう住宅車の出現は 'a revolution in living and on a rapid increase' と述べている．都市が郊外へ発展して行くのも市内には駐車場が無くなりつつあるからであり，一つには自動車が生活の一部になつているからでもある．この 'mobil home' は，郊外のある位置に定着することなく移動することが出来る訳で，これに対して立派な公園にも似た駐車場も設けられている．駐車場の従業員は "……last year one in four new housing units in the whole country was a mobil home" と云う．大地に定着して生活の基盤を築くという伝統的な生活方式を棄てたこれら 'mobil home' の住人に対して，「或る土地とか社会に根（root）を張らないで，暮して行くのをどう思うか」とスタインベックは尋ねている．彼等は "What roots are there in an apartment twelve floors up? What roots are there in a housing development of hundreds and thousands of small dwellings about exact alike?" と答え「ヨーロッパでの狭い窮迫した生活から逃れてアメリカへ渡り，更に New York での暖房もエレベーターもない不便なアパート生活を捨てて，住宅車を選んだのだ」と云い，「"Who's got permanence? Factory closes down, you move on, good times and thingS opening up, 'you move on where it's better. You got roots you sit and starve……" (*p.* 91) 不景気になればなまじ生活の根を下してそれに執着すると飢えねばならない．」と語る．スタインベックはこれは新しい型の frontier rpirit であつて元来アメリカ国民は，一箇所に定着することは肯んじなかつた restless, mobil people ではなかつたかという想いを新たにしている．そして人類一般に根（root）は有体で動かせない土地の所有に

根ざしていて，人類は一般に移動を続ける動物であり歴史的に考えると根を下したといつても短期間に過ぎない．「根は恐らく心理的に必要なものとして過大評価されてきたが故に，その必要性が深く，古いものであれば，それだけ一層他所へ行きたいという衝動，意志，憧れが強いのであろう」と結んでいる．

(2) 特にアメリカ的なものとして映つたもの．

"What is American?" という問題は，極めて興味深い問題であつて，ジャーナリスト，社会学者等の恰好な研究題目にもなつて来た．John・A・Kouwenhoven 氏の "What's American about America"という1956年7月に発行された Harper's Magazine 誌上の論文（Americana May. 1957）の冒頭に次のような箇所がある．「今日程 'アメリカ発見' が一般的に流行している時代はない．……アメリカの発見者達は勿論，殆ど350年前 Captain John Smith がアメリカに関する最初の本を書いて以来絶えず彼等の経験を記述して来た．しかし Smith が云うように Virginia へ行つた者が全て Virginia を理解する訳でない．三年程前に，多くの大学のアメリカ研究計画を後援しているカーネーギー財団はその季刊報告に「誰がアメリカを知るか？」という題をつけて「誰も知らない，われわれの議員，ジャーナリスト，民間指導者，外交官，教師等もアメリカを知らない」といわん許りの事を云つた．……Henry James が The American Scene を書いた時に考えた如くこの国は，「余りにも大き過ぎて拠理し難く，一つの統一体として理解しようとしても，地理と血統に変化があり過ぎる．その理由が何であるにせよ至るところに矛盾する証拠が目につく．従つて観察者は，一種の多元論的観念で満足しなければならない」(…この論文には詳細に what is America について12項目を挙げて記述している）スタインベックも「アメリカとは何ぞや」を探求に出掛けてはいるが，この問題に対して明確な答を述べることが出来たとは思われない．しかし彼の所謂，底に流れる non-teleological way of thinking に基く観察の記述から読者が得るものは様々であろう．アメリカに住むアメリカ人は，仮令何人種であれ，この記述の中にそれと思い当るものを探し当てて，何等かの感慨を覚えるであろうし，アメリカ以外に住む外国人は，自国の文明とは異質の文明をこの中に見出して又別な感興を覚えるであろう．とにかく一般論的な what is American? についての解答を与えることが，到底可能には思えない．したがつて読者がどのような印象を受けるかは最早スタインベックの関知し得ない又する必要もないことであろう．彼によればアメリカの最もアメリカ的なものは，アメリカに於ける Texas の地位と性格であるように思われる．Texas の性格を "…For all its enormous range of space, climate, and physical appearance and for all the internal squabbles, contentions and strivings, Texas has a tight cohesiveness perhaps stronger than any other section of America." 「地理的にも広大で，地理的条件も様々であり，又その内部でどのような争いがあろうと，その強力な結合力に於いては，国内の他の如何なる地方よりも優つている」とスタインベックは説明しているが，このテキサスの性格は，アメリカの世界に於ける位置と性格に他ならないと見ることが出来る．更にテキサス人の伝統的性格を，"The tradition of the frontier cattleman is as tenderly nurtured in Texas as is the hint of Norman blood in England.……Business men wear heeled boots that never feel a stirrup and men of great wealth who have houses in Paris and men of great wealth regularly shoot grouse in Scotland refer to themselves as little old country boys…" the successful man with his traditional ranch, at least in my experience, is no absentee owner. He works at it, oversees his herd and adds to it." と説明しているが，更に"the "little old country boy" at a sympony, the booted and blue-jeaned ranchman in Neiman-Marcus, buying Chinese jades" (*p.* 203～205) と描かれるテキサス人の姿は，外国人の最も好んで描くアメリカ人の像でもある．そしてアメリカ経済の大勢を左右する程の地下資源から生じる財力に物を言せるテキサス人のエネルギーを簡潔に説明する "Texas is rich in recoverable spoil. If this had not been so. I think I believe the relentless energy of Texans would hane moved out and conquered new lands. This conviction is somewhat born out in the restless movemeuts of Texas capital. The oil deserts of the Near East, the opening lands of South America have felt the threat. But now, so far, the conquest has been by purchase rather than by warfare. There are new islands

of capital conquest: factories in the Middle West, food-processing plants, tool and die works, lumber and pulp. Even publishing houses have been added to the legitimate twentieth-century Texas spoil." (*p.* 205) 経済的にも政治的も巨大な資本を背景に一大勢力を為しているテキサスは，その儘アメリカの動向を支配している感さえある．アメリカが歴史的に日が浅く，歴史的に誇るのが無いが故に有名人の出生場所や時には殺人や銀行強盗のあつた場所などを誇らしげに表示しているという episode や，交通標識の表現にも州毎に独特の癖がある．又 Maine 州のような北部に住む人間が，冬になると Florida へ出掛ける風潮があるといつた如何にも広大なアメリカ，様々な性格の州が構成するアメリカの複雑さを物語る episode もアメリカのみがもつ一面を物語る興味深い箇所である．

(3) 人種問題の現実と彼の態度

'アメリカの苦悩' と云われる黒人問題についても，一人のアメリカ人として深い関心を寄せているが，スタインベックは人種問題は，"an original sin of the fathers was being visited on the children of succeeding generations" と原罪論を持ち出し彼なりの結論を出して，南部開拓の陰に行われた暗い奴隷売買以来，その時代から現代へと引き継がれた罪であると云う．そして南部の友人は，黒人白人を問わずこの人種問題が話題に上ると皆，スタインベックのような北部人が入つて行けない 'a room of experience' に閉じ籠つてしまうので卒直な意見の交換が出来ないのだと述べている．スタインベック自身の黒人観は，故郷 Salinas での黒人クーパー一家との交際，サリナスでの社会的地位等の経験から「黒人は，傷つけられたり侮辱されたりしなければ，戦斗的にも，警戒的にもなるまい．黒人自身も自らの尊厳を持つていれば，殊更に居丈高にもなるまい．劣等と極めつけられねば，その能力を正当な限界にまでは伸ばせるであろう」というものである．そしてスタインベックが，子供の頃に黒人の子供が，その幼児期 (gelatin plate of babyness) に，劣等だと極めつけられて本当に勉強も出来なくなつた時のその黒人達と白人の間に引かれた恐れと悲しみの幕を，悲しく思つたものだと述懐している．Texas に滞在中，New Orleans の小学校で黒人学童の入学をめぐつて紛争か起きたという報道に接する．"I must admit that cruelty and force exerted against the weak turn me sick. …I knew I was not wanted in the South when people are engaged in something they are not proud of, they don't welcome the witnesses. In fact, they come to beliene the witness cause the trouble." 南部へ出掛けるのは幾分気が進まない乍らも事件が，学校教育に関する事だけに前述した対黒人観からも特に関心を抱いて南部へ出発する．この事件で特に報導関係者の耳目を集めたものは，"mother" とこの事件に登場するには幾分奇異な感じのする名前で呼ばれる一群の中年の女達であつた．この女達は毎朝学校へ登校する黒人の子供にそして又同じ学校に通う白人の子供にも毒舌を浴びせるのだが，特に又この一群の内の何人かは，その毒舌を発する術にすつかり熟練していて，その奇妙な行事を見物に集る人間達から応援団 (Cheerleaders) と呼ばれていた．この事件を実際に見ようとして現場へ赴く途中で南部人の Taxi driver は，「こういう事件は "Its the goddamn New York Jews cause all the trouble. ……They just stay in New York, there would not be trouble. Ought to take them out." (*p.* 225) とニューヨークからやつて来る白人（ユダヤ人）が黒人にたきつけて引き起しているので，「そういう白人を追い出せばこんな面倒は起らないのだ.」と云う．そしてそんな白人に手か引かせるというのは，リンチにかけるとでも云うのかとスタインベックの問いに「勿論でさ」(I don't mean nothing else, mister) と答える．こういう空気に備えてスタインベックも海軍帽を被つているところから Liverpool 訛りを真似たという．南部の一部の人間であろうが，「黒人問題はユダヤ人が煽動している」として黒人に対する以上に憎悪を燃やしている事実は，黒人問題を一層深刻にしているように思われる．現場に到着して群衆に交つて待機する内に "Nellie"（仮名）という応援団の一人が登場する．この女は左手の指に a wedding ring をはめていないところからすれば未婚の女に違いないが，誇らしげに自分達の活躍を報じた新聞の切り抜きを後生大事に頭上にかざして，群衆が口々に述べる挨拶を受けるのである．物々しい警戒の内に，黒人の子供が現われ，さらに白人の父親に連れられて白人の子供が現われると，一層激しいののしりが浴びせられる．"A shrill, grating voice" が飛んだ．"The yelling was not in chorus. Each took a turn and at the end of each the crowd broke into

howls and roars and whistles of applause. This is what they had come to see and hear. No newspaper had printed the words these women shouted. It was indicaetd that they were indelicate, som even said obsence. …… but now I heard the words, bestial and filthy and degenerate. (*p.* 227)" 如何に惨まじい言葉がこの女達によつて吐かれたか，スタインベックは吐き気さへ催す程であつた．"The words written down are dirty, carefuly and selectedly filthy. But there was something far worse here than dirt, a kind of frightening witches' Sabbath. Here was no spontaneous cry of anger, of insane rage." (*p.* 227) 新聞で伝えられる'言葉'（悪口）は幾分選択されて汚いなりにもまだましで，ここで実際に聞いてみるとまるで魔女の咆吼のようであつた．もうここには善とか悪とかの原則もなければ何の方向もない．只もう全くの混乱があるのみだつた．しかもこの女達は，拍手喝采を受けたくて，尊敬されたいが為に，無感覚な乱暴な行為を行つているのであつた．"These were not mothers, not even women. They were crazy actors playing to a crazy audience. The words were tried and memorized and carefully rehearsed. This was theater." 狂気に満ちた芝居が行われていたのだ．良識ある南部人がこうした事件で New Orlears が世界中から誤解を受けているのを傍観していると残念に思うのである．

この事件の後，ci-gîts と呼ばれる New Orleans では古い家柄に属する一人の南部人と話し合つているが，この会話の中にスタインベックや良識ある南部人等の黒人問題についての意見かうかがわれる．つまり「黒人を対等に人間的に待遇する事と，黒人に対しての奴隷時代からの特殊な感情，一人間を動物として扱つて来た，而も人間を動物として扱う態度に感情移入（empathy）が加ると，扱う側の人間の方が精神的異状をきたすが故に一層努めて無感覚に，黒人を遇して来たという云わば歴史的な黒人感情は，一朝一夕では変えられない．一は全く別な問題である．具体的に云つて黒人といくら対等に交際していても妹を嫁にと言われたら，考えてもみないことであり，黒人の側にしてもそんな事は望まないだろう」といつた意見である．黒人問題は何も現在になつて急に生じたことでなく古くからあつたことであり，アジヤやアフリカでも現在起りつつあることだ．結局は，"If they outnumber us we will disappear, or more likely both will disappear into something new" ということになるのであろうが問題はそれ迄の過程であるとする．

白人の側にも，黒人の差別撤廃（所謂公民権法の完全実施）に対して賛否両派に分離しているように，黒人の側にも，黒人としての宿命を悲しく受け止め，無益の摩擦を避けて，白人社会と離れて暮して行こうとする古い世代の黒人と，Martin Luther King の passive but unrelenting resistence は遅すぎ時間がかかり過ぎる，積極的に sit-ins や bus boycott に加わり，急進的な運動が，黒人地位向上の運動全体を反つて破壊しないかというスタインベックの問いにも，一人前の人間に，生きている内に，現在なりたいのだと主張する若い世代の黒人もいるのである．この人種問題にからむ暗い事件を自分の眼で確めたスタインベックは，"It is a troubled place and a people caught in a jam. And I know that the solution when it arrives will not be easy or simple. I feel with Monsieur Ci Gît that the end is not the question. It's the means-the dreadful uncertainty of the means." (*p.* 242)

結果はともあれ，問題解決の手段の覚束なさに暗澹たる思いに陥つている．この悲しい事件の後逃げ出すようにして一路北上，New York に帰着してこの旅を終えている．扨てこのアメリカ探訪の結論を，テキサスを訪れる前にスタインベックは次のように述べている．"…What I carried in my head and deeper in my perceptions was a barrel of worms. I discovered long ago in collecting and classifying marine animals that what I found was closely intermeshed with how I felt at the moment. External reality has a way of being not so external after all." (*p.* 185) Ed. Rickettes と一諸に海洋生物探集に出掛けた時の経験を引いて，「自分がこうと感じるものは，外面的にどうあろうと内面的にそのものとそれ程かけ離れてはいない．つまり自分がアメリカ的だと感じるものは，外面的にアメリカ的なのである．」

"From start to finish I found no strangers. ……For all of our enormous geographic range. for all of our sectionalism, for all of our interwoven breeds drawn from every part of the ethnic world, we are a nation, a new breed.

Americans are much more American than they are Northerners, Southerners, Westerners, or Easterners. And descendants of English, Irish Italian, Jewish, German, Polish are essentially American. This is not patriotic whoopde-do; it is carefully observed fact." (*p.* 186) そうしてこうしたことが約二百年足らずの間に，大部分はここ五十年間の内に起きたことこそ驚くべきことだ．"The American identity is an exact and provable thing" と結んでいる．極めて直覚的な結論であるが，スタインベックの特徴の滲み出た結論ではある．つまり客観的観察に基く科学的思考（scientific thinking）の態度を取り乍ら，極めて直覚的な結論を下すのは，客観的事物（つまりアメリカ）に対する愛情が，極度な迄に深いが故に，合理的，科学的思考に基いた結論とは異つてしまつたとも云えるのである．

㈢ スタインベックの文学的特質について

Travels with Charley は副題の「アメリカ探求」が示すように，表面的にはアメリカの現実を再認識することが目的であつた事は既に述べて来たところであるが，この旅行記の本当の面白さは，随所に挿まれた大小様々の episodes に在ると云える．全編中に展開される愛犬チャーリーに対しての濃やかな愛情の記録，「あらゆる思い出の中で，最も鮮やかに燃える大切な経験」とまで表現している移住労働者との出会い．田舎廻りの旅芸人の一幕．シカゴのホテルで佗しい一夜の一刻を街の女と過したらしい「ハリー」という安サラリーマンについての一語り，旧友「ジョニー」との感傷的な再会等，そのまま短編として充分読者を満足させ得るものである．スタインベック自身が次のようなことを云つているが，"There were long books between these little novels. I think the little ones were exercises for the long ones" (*p.* 38 Steinbeck & His Critics) この旅行は短編は長編への手がかりとするスタインベックの素材蒐集の旅といつた性格を帯びているように思える．The Grapes of Wrath, East of Eden 以来，多くの批評家に作品の質が低下していると云われているが，これはむしろ彼の創作能力の低下というより，一口に云つて，彼の意欲つまり，The Grapes of Wrath を書く動機となつた正義感（sense of justice)といつたものをかきたてるテーマに行き当らないからではないだろうか．The Long Valley を中心とする秀れた短編の裏付けとなつているスタインベックの自然詩人的感覚，ユーモア，人間的暖かさは，この旅行記の中の幾つかの episodes の中に見出すことが出来る．こうした優れた短編作家の資質を示すと同時に，この旅行記には OF Mice and Men 以来，彼の文学的特質とも云うべき "non-teleological thinking"（非目的論的思考）が，依然として流れている点は矢張り注目に値する．友人である，海洋生物学者 Ed. Ricketts と海洋生物採集に出掛けた時の記録であり，スタインベック批評家の一人 Frecman Champney の表現を借れば "Sea of Cortez occupies about the same place in Steinbeck's work that Death in the After noon does in Hemingway's." とまで重要視されている Seaof Cortez の核心を成しているこの non-teleogical thinking は，一口にして云えば -an attitude toward reality-「現実に対する一つの態度」であり，-to consider events as outgrowths「現実を自然の成行」と考え 'a thing is because it is' でなく，「決してある特別な原因によつて生じた結果としては述べない」という態度を云うのである．つまり "what could be or should be or might be" ではなく "what actually is" を見詰めようとするのである．Antonia Seixas が "this 'non-teleogical (=casual) view point is a 'non-blaming' view point, since according to this, everything is simply part of a pattern." と指摘しているが，'non-blaming' view point が，各所に見出される．"This is not offered in criticism but only as observation", "This is not said in criticism of one system or the other…" といつたものから "there is no moral in these observations, nor any warning, …" "This sounds as though I bemoan an older time, which is the preoccupation of the old, or cultivate an opposition to change, which is the currency of the rich and stupid. It is not so.…" というものまで，とにかく主観を交えないで，客観的に，科学的に観察した事実を伝えようとする態度を頑くなまでに言葉に表わしている．この態度の故に，冷酷で，冷笑的であり，「答えに欠けている」というそしりを受けている一面もあるが，その背後には彼が natural「自然」であると感ずるものへの異常なまでの深い愛情が脈打つていることは，否めない．一方この non-teleolo-

gical thinking の土台である biological view of man に根差した essay が，the Mojave 砂漠を舞台に展開されているが，スタインベックの文学の特質たる生物学的人間観の一端がこの中に明確に示されている．'biological view of man" は，特に OF Mice and Men, In Dubious Battle, The Grapes of Wrath, に於いて，人間の集団を，動物学，生物学者の観点から描写する手法が重要なテーマにもなつているように，スタインベックの文学の最も重要な特質である．人間の複雑な心理的克藤，愛情の機微，道徳的苦悩といつた内面的要素を離れて，一つの生命体として人間をとらえ，生命の神秘，生命の本能，生命の斗い等を，海洋生物を観察する生物学者の眼で，見詰めようとするこの手法は，人間の介在しない非人称の世界の展開であり，この非人称小説の限界は，The Grapes of Wrath までと云われているが，この旅行記でスタインベックが依然として，生物学的人生観を保持していることは，今後の作品が如何なる形をとつて現われるかを，予測させるにも充分である．

扨，スタインベックはカリフォルニヤを後に the Mojave 砂漠を横断，テキサスに向うのであるが，砂漠の神秘と相まつて生命の神秘に深い思いを寄せ，極めて含蓄のある philosophical essay を展開している．"I have driven through the Southwest many times…… a great and mysterious wasteland, a sun punished place. It is a mystery, something concealed and waiting. It seems deserted, free of parasitic man, but this is not entirely so. There is a breed of desert men, not hiding exactly but gone to sanctuary from the sins of confusion. (*p.* 189)

「砂漠は，太陽に罰された不毛の土地であり何か隠され待ち伏せしているように思える神秘な土地であり，the great concepts of oneness and of majestic order（自然と生物の単一性，壮大な宇宙の秩序観）の生れる場所である」こうしたスタインベックの自然主義的，神秘主義的傾向は，旅行記中至るところで文明と隔絶した自然を前にするとき常に吐露されている．

砂漠に住むのは罪業に満ちたわずらわしい文明社会（watered land）を逃れて，灼熱の不毛の土地に神聖な宮殿を見出した砂漠族の人間であり，こういう文明社会を離れて，自然の中に暮そうとする人間は，いつの時代にもいるものである．そして砂漠では昼間は，生息する動物を見出すことは難しいが，夜になると，"a' world of creatures awakens and takes up its intricate pattern. Then the hunted come out and the hunters, and hunters of the hunters…" (*p.* 191) 獲物を追う物，追われる物，生きるための奇烈な斗いが繰り拡げられる．この the factor of survival（生き残るという要素）こそ，信じられないような偶然から生命が生れて以来，生命体が存在して来た神秘的な方程式なのである．地球上の各生命体は，生存のための独自の機構をつくり，あるものは失敗し，あるものは地球上を一杯にした．最初の生命体は簡単に消滅させられたかも知れなかつたし，生命誕生の偶然は二度と起らないかも知れない．がしかし一旦生命体が存在すると，その最初の性質，義務，前提，方向は生き続けることである．

そして何かの偶然がこの生命体を消すまでは，現在も将来も変りなく生命体は生き続けて行こうとするであろう．"The desert, the dry and sun-lashed desert, is a good school in which to observe the cleverness and the infinite variety of techniques of survival under pitiless opposition" (*p.* 192) 砂漠こそ，生命体が生きて行こうとするためのあらゆる智恵と技術を観察する恰好の場所であり，又好まれない場所であるが故に非生命に対する生命の最後の足場になるかも知れない．そして "in the rich and moist and wanted areas of the world, life pyramids against itself and in its confusion has finally allied itself with the enemy non-life. And what the scorching, searing, freezing, poisoning weapons of non-life have failed to do may be accomplished to the end of its destruction and extinction by the tactics of survival gone sour. If the most versatile of living forms, the human, now fights for survival as it has always has, it can eliminate not only itself but all other life." (*p.* 192) 非生命と手を結んで，腐敗（gone sour）した生存技術を身につけてしまつた生命体の内でも最も万能な人類は，自ら生存せんとして，自らのみならず，他の全ての生命体をも滅してしまうであろう．その時，砂漠のような荒廃した不毛の土地が，生命再分布の苛烈な母胎になるかも知れない．"The lone man and his sun-toughened wife who cling to the shade in an unfruitful and uncoveted place

might, with their brothers in arms-the coyote, the jackrabbit, the horned toad, the rattlesnake, together with a host of armored insects-these trained and tested fragments of life might well be the last hope of life against non-life."

不毛の砂漠の陰にしがみつく孤独な男と，日焼した妻は，ヨヨテその他訓練され，試練を受けた生命体の断片と共に，非生命に対する生命体の最後の希望になるかも知れない.」この essay の内には，その爆発的繁殖と，狂的な文明（non-life）の発達に伴つて本来の「自然と結合した」生活を最早営むことが出来ない状態に陥り，生存斗争の技術も本来の姿から逸脱し，破局への道をたどろうとしている人間の，生物学的危機感がこめられている.「文明（non-life）の発達は，自然と生物の結合（oneness),を破壊するものであり，人類の生存を危くする」というスタィンベックの文明観が，はつきりと打ち出されているのである.

文明に毒されなかつた時代の，色彩と光りに満ちた谷カリフォルニヤのサリナスに育ち，海洋生物の生態学に深い関心を持ちその生物学的素養を自らの文学の支えとしているスタィンベックは，更に生来のユーモア，人間的暖かさ，を加えて，一種独得の作風を持つてきた．政治的イデオロギーも持たず，1930年代の不況を背景とする代表作家とされているスタィンベックを支えていたものは，自然の法則に従つて自然な生活を営もうとする人間を，無慈悲にも阻止しようとする非生命,（社会的不正義であつたり，時には自然の暴力であつたりするが）に対する深い人間的愛情に根差す正義感の発露に他ならなかつた．The Grapes of Wrath がそうであるように．しかし，The Long Valley にみられる短編の詩的な美しさは，そのリズム感と共に，スタィンベックの特質の一つと云える．Travels with Charley は，旅行記としても，novelette としても彼の作品中，特筆される程のものではないかもしれないが，スタィンベックの抒情性，story teller としての才能，humor, warmth が依然として彼の文学の本質であることを物語るに充分なものである，と云うことが出来るのである．スタィンベックが再びThe Grapes of wrath と取り組んだ意欲を発揮するようなテーマが，この旅行を通じて得られはしなかつたであろうか．最早短編作家としてのみに，その活動が期待されるだけであろうか．スタィンベックの意欲に溢れた次作を期待すること切なるものがある.

参考書物名

The Portable Steinbeck (The VIKING PRESS)
STEINBECK AND HIS CRITICS
(E. W. TEDLOCK, JR AND C. V. WICKER
UNIVERSITY OF NEWMEXICO PRESS)
The Wide World of JOHN STEINBECK
(PETER LISCA, RUTGERS UNIV., PRESS.)
AMERICANA MAY・1957